

皆さんが Web サイトのコンテンツや、カラーで資料を作られる時には、見やすさを考慮して作られていると見えます。ここでは「色覚バリアフリー」を例に、それらを見やすく作るための一つの視点を皆さんにご紹介します。

●色覚バリアフリーを考慮する意味

日本人男性の数パーセントは色弱者とされています。私はここに含まれているようです。女性の場合は、1パーセントに満たないそうです。分かりやすさや画面上の誘導を意識した色使いが、一定の比率の人に対しては、無意味になっているかもしれません。

幸いにも日本国内では色覚バリアフリーがスタンダードな動向にもなっています。例えば、テレビのリモコンにある「赤」との補記もよく見られます。町なかにある地図や、確か全日空の機内誌の地図にも、「色の識別が困難な人にも分かりやすいように…」といった注記を見つけることができます。

●色覚バリアフリーとは

色覚バリアフリーとは、色弱者などにも見やすいデザインを採用することなどを示します。“カラーユニバーサルデザイン”と呼ばれることもあります。私見ですが、より多くの人が見やすく、分かりやすいデザインを指向することも含まれると考えています。

なお、色の識別が困難な人の呼称として定着したものはないようです。「色覚異常」「色弱」「色盲」も比較的良好に見られます。「色覚異常」については、“異常”の語感や考え方がどうかと思います。また、“少数者で配慮不要”“異常は正常に矯正されるべき”との印象を与えるかもしれませんので、ここでは「色弱者」を使います。

●何が見にくいか—事例紹介

私程度の人であれば、千円札と五千円札、赤信号と黄信号の色はよく似た色に見えます。

コピー機の動作中のランプ、照明集中スイッチのランプなど、赤と緑で区別している(らしい)ものはほとんど分かりません。サーバ機の前面にあるオレンジ(らしい)警告ランプも他のランプと区別できません。紙にピンクのマーカでしるしを付けられても、気付かないこともあります。

東京タワーの赤はオレンジっぽくて、消火器は普通の

赤のようですが、前者は明るめの赤、後者は暗めの赤に見えている人もいるはずで。また、失礼ながら、Web上の図書館の開館カレンダーは、いつが休館日か分からないものが見られます。

●では、どうする？

見えている人には、何が見にくい色か分からないでしょう。そのため、理想的な方法を多くの皆さんが身に付けることは困難だと思われます。

そこで、私から、簡単な「すぐに活用できる色覚バリアフリーの Tips」をお示しします。

- (1)とにかく色覚バリアフリーという言葉を感じる
- (2)可能なら、色弱者の友人、同僚を見つけてチェックしてもらう
- (3)ディスプレイによって色合いは異なることを知る
- (4)次のようなことを心に留める
 - (a)淡い色を識別用の色として使わない
 - (b)ピンク、緑、茶色、オレンジと呼ばれる色で識別する場合は、その色だと伝わらないこともある
 - (c)色だけで識別しようとしな(色は補助として使う。色名を補記する)
 - (d)小さい面積で色を使わない
- (5)神奈川県作成の「カラーバリアフリー：色使いのガイドライン」で示されている例をいくつか覚えて

おく(お勧めです)

http://night.nig.ac.jp/color/guideline_kanagawa.pdf

(*)図書館の開館カレンダーは、上記(4)の合わせ技で見にくくなっているものが多いです。個人的コンサルタント、お受けします!

●まとめ

ぜひとも、この機会に「色覚バリアフリー」について、少しでも気に留めていただければ幸いです。

INFOSTA Forum

第 242 回

色覚バリアフリーの Tips



くぼやま たけし
久保山 健

大阪大学 情報推進部